

夏の合宿研の会場変更！

◆ 8 月 2 0 日（土）午後 2 時～ 2 1 日（日）午前 1 1 時半

2 0 日（土）午後 1 時半～ 受付開始

2 時～ 職場や子どもたちの近況報告など

2 時半～ あいさつ（藤原和好先生）

実践報告 入澤佳菜さん（奈良）「緑の馬」（5 年生）

5 時終了。6 時から懇親会（別会場）

2 1 日（日）午前 9 時～ 受付開始

9 時半～ 実践報告 庄司たづ子さん（三重）「白いぼうし」（4 年生）

11 時～ 機関誌 1 0 号の編集について

◇会場

松阪市子ども支援研究センター 2 階ミーティングルーム

関係の皆様にご迷惑をおかけしました。

当初奈教大付属小学校を予定していましたが、当日の奈良市近辺の宿はどういうわけかどこも予約でいっぱいでした。急遽、三重大学（津）にしたら、今度は鈴鹿のレースと重なったとかで津のホテルも宿泊できない状態でした。

最後に松阪にお願いしました。駅前のホテルがまだ空いています。三重県内の方もできれば宿泊してください。ゆっくり語り合いましょう。

また、奈良や津の宿を予約されてキャンセルせざるを得なかったみなさんにはおわびのしようもありません。手数料など発生してしまいましたら会で負担させていただきます。ご遠慮なくおっしゃってください。

今後はこういうことにならないように、事前に宿の状況を調べます。申し訳ありませんでした。

7月例会三重

中西祐司さんの「ごんぎつね」実践報告

参加者は16名でした

中西さんの実践発表の題名は「中山に語り継がれてきた『ごんぎつね』を読む」です。そこからも分かるように、この物語がどのように伝えられたのかを子どもたちと一緒に考えようとするものでした。昨年度3学期のとりくみです。

その課題を、中西さんはこのように考えていました。

昔、とのさまのいた時代におきた「ごんぎつね」の話を村の人々が語り継ぎ、その話を小さい頃に村の茂平から聞いた「わたし」が読み手に語りはじめています。村から少し離れたところに住む一人ぼっちな小ぎつね「ごん」は、村人と関わりたい気持ちをもつものの、いたずらをするだけでしか関係性を見出すことができていませんでした。また村人の方でも「ごん」は余所者であり、厄介者であるそれ以上でもそれ以下でもないような認識を持っていたように感じます。そんなごんが母を亡くした「兵十」に「一人ぼっち」という共通性をみたところから、ごんの内面の変化が始まり、物語が動き出します。

ごんは、自分の過失から兵十に母との死別をより無念なものにさせてしまったという思いから、兵十に償いを始めますが、これはあくまでも、ごんの思い込みであり事実がどうであったかは語られていません。償いを続ける中で、ごんの内で兵十の存在は大きくなっていきます。最後の場面で、ごんがそれまで入ろうとはしていなかった、兵十の家の中に入っていったのは、前の晩に聞いた話「自分の行為が神様の仕業と誤解されてしまう」に反発する形であらわれたもの、思いを寄せる自分の存在に気付いてもらいたいという心情のあらわれだったのでしょう。

兵十は、ごんが思うような一人ぼっちではありません。加助をはじめ、村でのつきあいは確実に存在します。また自分に思いを寄せるごんには最後まで気が付きません。兵十にとってごんは、最後まで「悪戯が過ぎる盗っ人狐」だったのでしょう。ですから、毎日栗を届けてくれたのごんだとわかったときの兵十の胸中は疑問、後悔、苛立ちなどでいっぱいだったことでしょう。そして自分に起きた不思議な体験を村人たちに話し始め、村人から村人へ話される中で、ごんの物語が生まれたのでしょう。

今回、中西さんは各場面の読みとりの詳しい授業記録を用意してくれました。授業記録を自分で作るのは時間のかかる大変な仕事です。でも、この取り組みは自分の授業をふりかえり高めていくことに直結します。語り合う会の会員の確かな実践力はこうして

培われてきたのだと思います。

その全記録はホームページに載せました。ぜひ学んでください。

ここでは、語り継がれてきたということだけにしぼって、子どもたちの読みをたどります。まず「このお話が語り継がれてきたことについて思うこと」という課題を選んだ子どものはじめの感想です。

のぞみさん＝私はいたずらとか何も考えずにおったら何がおころうかわからないよというふうに語り継がれてきたのかなと思いました。

だいごさん＝このお話は多分、ずいぶん昔に本当にあったことをみんなに知ってもらいたくて今まで語り継がれてきたんだと思います。そして新美南吉さんは「ごんぎつね」というお話がいつまでも語り継がれてほしいんだと思います。

みなみさん＝私は中山さまから伝わってきて中山さまは何年前の人なのだろうと思います。もし百年以上前だったら、百年間伝統的に守られているからすごいと思いました。もしこの飯高でもこんなお話があったらいいなあと思います。それにあったとしても飯高の人しか知らないと思うから、そういうのは、もっといっぱい地域に広めたらすごいと思います。

あやねさん＝このお話はいいと思ってやったことも駄目になることもあるっていうことを伝えたいんだと思います。ごんがいたずらをしたのも、いたずらはダメでも、いつもどおり大事なうなぎだなんて思わずにしたけど、それが兵十のおっかあ食べるうなぎで、ごんは兵十を悲しませてしまったし、いわしをあげたときも、兵十のためにやったつもりが兵十のためになんて全然なっていなかったからです。それと兵十もちゃんと見ないで、ごんを撃って気づいたのが撃った後で後悔してしまったからです。

こうださん＝この話が語り継がれてきた理由は多分きつねも時にはいいことをするというのを教えてくれるんだと思いました。

教訓的に語られてきたと感じている子どももいますね。誰が語り継いだかを考えた授業です。2月18日（金）です。最初は、実際にあった本当の話か、つくられた話かが論点になりました。

りゅう＝本当の話だと思います。本当の話じゃなければこんなにも語り継がれてきていないと思うから。

みなみ＝きつねの気持ちとか分かるわけないから私は嘘の話だと思います。

のぞみ＝私はみなみちゃんと同じ嘘だと思います。きつねの代わりに人間同士であったと思って、それで一番最後はきつねやったら撃たれとるけど、人間やったら、人間同士やったら撃ったりはしないと思うけど、人間同士であったことをちょっと変えたんやと思います。

みゆ＝本当にあった話をちょっと変えて、きつねはこう思っとるんじゃないかって、そういう風にわからないところは面白いようにして、したんだと思います。

あやね＝嘘の話だと思います。理由はきつねの気持ちは人間にはわからないと思うし、もしそういうところ以外が本当の話でも、そういうところは本当じゃないから。

中西 T＝嘘の話っていうけど、これは新美南吉が作った話。でも形としては本当にあったことで語り継がれてきたんだよって書いてあるんだよ。そこは区別してほしい。物語を読んでいるけど、物語の中では本当の話になっている。

で、誰が語り始めてきたんやろな？

※この説明がポイントだと思います。子どもたちは昔話のように語り継がれてきた過程を考えているようですが、そうではありません。中西さんが言うとおりに、この物語の中でどう語られているかなのです。子どもたちには少しややこしかったようです（橋本）。

りゅう＝兵十だと思います。一番身近にいたのが兵十だから、ごんのことは一番知っとるんだから兵十が語っていったんだと思う。

みなみ＝中山さまの前の時代からあったように思うから、中山さまの前のとのさまだと思います。

のぞみ＝私は茂平だと思います。

ゆうき＝村の茂平だと思います。

あやね＝村の茂平のおじいちゃんのおった村の人だと思います。

中西 T＝今のところ理由を言ってくれたのはりゅうくんだけやな。ところで、このお話をみんなに語っているのは誰？

子ども＝新美南吉

中西 T＝作者は世界を創っている人。

みなみ＝私は茂平が語っているんだと思います。

りゅう＝「わたし」。小さいころに茂平から聞いた。

中西 T＝そうやよな。じゃ茂平がこの話を作ったのかな。

ゆうき＝「わたし」が何か聞いた話を文章にしとる。

中西 T＝わたしが作ったん？

子ども＝聞いた話って書いてある。

中西 T＝りゅうくんが言ったことを思い出すとええかもな。茂平はごんたちの近くにおったの？

こうだ＝おらへん。だからしっかりは知らへん。

中西 T＝てことは、茂平も誰かから聞いた可能性が高い。殿様がおった時代というのは江戸時代っていうん。侍のいた時代。わたしのおった時代は侍の時代とは、

こうだ＝違う。

中西 T＝現代っぽいな。だから茂平ということではなさそうだね。殿さまっていうのは

どう？

ゆうき＝とのさまっていうのはちょっと。

中西 T＝とのさまってどういうイメージ？

りゅう＝えらそう。

こうだ＝何でも命令ばかりしとって自分ではやらん。村人には語らへん。まず外のことをあんまり知らへんと思う。

中西 T＝とのさまは違いそうだね。兵十だろうか、村の人たちだろうか。

みなみ＝私は兵十だと思います。理由は教科書の P71 に兵十が加助に言っとるから、また加助が村の人に言ったりして、それで村中に広まっていったんだと思います。

のぞみ＝私は兵十じゃないと思います。加助がしゃべるだけでは広まっていかないと思うから、兵十ではないと思います。

こうだ＝僕は兵十が加助以外にも相談してそこから広まっていったんだと思います。

まさや＝僕も周りの人と相談しとるからそこから。

みなみ＝兵十と加助がお城の前で話をしとって、それを中山さまが聞いて、とのさまだから、これは伝えていかなければならないって思ったんだと思います。

りゅう＝そんなに耳がいいわけないって。

中西 T＝こうくんとみなみさんの意見は正反対やね。

みゆ＝兵十が自分で言うのはなんか自慢みたいに聞こえるから、違うと思います。

あやね＝兵十が言っていたら、自慢できることじゃないのに自分で語っていくのは変だと思います。

中西 T＝先生が誘導しとるみたいになってきたけど…、兵十がしたことを知っているのは誰なん？

りゅう＝兵十が撃ったことは誰も知らんと思う。

中西 T＝それなら兵十が誰かに話して、そこからなんじゃないだろうか。なんで話したのだろうかというのは考えてかなあかんし、それをどうして語り続けてきたのかも。

これはごんぎつねを読みながらどこかでは考えていてほしいところです。

※結局、事実実際に語り継がれたのかを想像するのか、この「ごんぎつね」という物語の中でどのように構造化されているのかを考えるのかが、判然としなかったように感じます（橋本）。

ここからは場面ごとの読みとりが展開します。2月23日から3月15日までです。学期末のあわただしい中なので毎日ではできなかつたそうです。

これらの詳細な授業記録をホームページに載せました。

さて、読み手としての感想の交流に入っています。その最後の様子です。

中西 T = ごんが持ってきたというのは兵十にも分かったし、それを兵十が伝えたら周りも分かるよね。でも何で持ってきたんやろかっていうのはその時は分からんだはずやよな。どうしてこの話ではさ、ごんは反省して、償いをしに持ってくるようになったやんか、なんでそういうことが村人に語るができるようになったんやろか。

言い方おかしいかな。はじめはわかっていなかったはずのことが、なんでこのようにわかってきたんやろ。答えはないかもしれないけど、3人組で相談して。

だいが = 兵十はごんにうなぎを盗まれたことを記憶をたどって行って、なんでごんが栗や松茸を持ってきてくれるようになったかを想像したんだと思います。

のぞみ = 私はちょっとだけ違って、うなぎとかじゃなくて、そのことで兵十は考えとると思うけど、おっかあが死んでから不思議なことがあるって加助に話とったから、そういうことから、ちょっとだけ思い出してきたと思います。

あやね = 兵十はうなぎをとられて、おっかあが死んでから不思議なことがあるから、加助に相談していて、他にもあったことを加助以外にも相談していると思うから、そういうので考えて行って分かってきたんだと思います。

みなみ = 兵十は、加助とかにごんのことを話したりして、そういうのとかで、加助もそれを聞いたときに、違う人とかにも相談しとると思うし、兵十も加助以外にも相談しとると思うから、そういうところとかで広まってきたんだと思います。

中西 T = みんな、ごんを撃ったとき兵十は絶対に後悔しとると言ったね。兵十はごんが持ってきてくれたというのは分かるけど、なんでかというのは絶対に分らんよね。後悔の中で、そういうのも考えたんじゃないか。そうする中でうなぎのことや加助との話のことや、前にりゅうくんが言ってたよね、きつねがそんなことするわけない。でも悪いと思っと思ったきつねがこんなことをしていた。そこで村人は一緒になって考えだしたのかもしれないね。それでこんな話じゃないかと考え、語り継いできたんだらうね。語り継ぐには、それなりの思いがあるはずだよな。それは最初に考えたよな。そのとき、きつねにはこんないいやつもいるんだということ伝えてたかったという人もいれば、もう少し考えて行動しなくちゃ不幸になるよっていう教訓じゃないかって言う人もいたけど、今ここまでしっかり読んできたやんか。書かれてない部分も君たちはどんどんイメージしてきたよな。こういうことがあったから、そういうことになったというところもしっかり読んできた。どうしてこの世界では、この話が語り継がれてきたんだらう。最後の感想にそのことにもふれて書いてください。

中西さんは、このように物語のしくみとして問うています。この問いかけは明確です。子どもたちは、どうでしょうか。書いたものを発表しあう授業を見ていきます。

のぞみ = ごんは一人ぼっちだったのに兵十のおっかあが死んでから兵十のおっかあみた

いに兵十の面倒を見ているように私は思いました。ごんは仲間と家族を失って仲間とかの代わりに村の人たちにいたずらをしたんだと思いました。だからごんは兵十に栗や松茸を毎日渡しに行けたんだと思います。ごんは最後に撃たれて死んだけど村の人たちは本当は優しいごんを知って、村の人たちは後悔したと思うから自分たちがごんにつぐないをしたいという気持ちで語り続けているんだと思います。

りゅう＝ぼくは、ごんの死に方はあまりに悲惨だから墓地にいたたいです。村人はごんのことをいたずらするきつねでみんな知っていたと思うけど、ごんは兵十にいたずらをして、「もうイタズラはしちゃいけない」と思って逆にお詫びを始めたから、えらいと思います。それなのにお詫びをしているときに兵十に殺されたんだから、みんな「かわいそうな死に方」とか言って広がって、それでみんないろんな子どもとかに、「こんなきつねがおって、こんな殺され方したんやよお」と言って語り継がれてきたんだと思います。この話は動物けど人間のことなのかもしれない。

中西 T＝のぞみさんとりゅうさん内容は似ているところがあるよね。せっかく心を入れ替えてやっている人を撃ってしまっただけかという。

みゆ＝私は結末はよくないけどいいお話だと思います。理由はごんはいたずらばかりしていたのに優しい気持ちになって毎日毎日いいことをしているし、兵十は悪いきつねだと思っていたごんのことを撃ったのを後悔して、ごんを好きになったと思います。私はそれで兵十とごんはお互い好きになったし、兵十はごんを撃ったことを、ごんはいたずらしたことを後悔していい話だと思います。悲しい話だけど嫌っていた人を会えなくなってから好きになることもあるかもしれないというのを伝えたかったんだと思います。

中西 T＝みゆさんはそれをええと言うんだけど、みんなはどう？

みゆさんは、兵十もごんを好きになったんじゃないかって、でもそのとき、ごんはもう殺されていないよね。結局二人が仲間になることはなかったやんか。思いがつかがることもなかったよな。ごんが死んだ後に、兵十はごんに思いを寄せる、それについてどう思う？

こうだ＝ぼくはいいとは思わないと思います。兵十が好きになったところで、もうごんは、死んでしまったから意味がないと思うから。

だigo＝ぼくはみゆさんと同じでいい話だと思います。ごんは最初から兵十を好きで、兵十も死んでから好きになったけど、思いは伝わらなくても、お互いに好きになったからよかったと思います。

のぞみ＝私はどっかわからないけど、ちょっと話は違うけど、兵十のおっかあが死んでから、ごんは気持ちとか、いたずらしていたのに急になんか、やめていったと思うから、そういうことで、兵十も気持ちはなんか好きって、気持ちは好きって思っと思うから、私はいいと思います。

りゅう＝ぼくもごんが死んでしまっただけから、兵十が好きになっても、ごんには分からな

くて、ごんには分からないから兵十が好きになっても、死ぬ前に好きにならなきゃ意味がないと思う。

ゆうき＝ぼくはごんは兵十のことを好きだと思う。でもごんは死んでいったから、死ぬ前に好きにならなくちゃ意味がない。

中西 T＝ゆうきさんとしては、そんなじゃあかんってことかな。

ゆい＝ごんが栗とか松茸を持ってきたのが、ごんて分かって兵十に、それで兵十が誰が持ってきたのか分かったから、ちょっとはいいと思います。

中西 T＝気持ちはわからなくても、行動さえ分かってくれればいいというんだね。

※この話し合いは大変興味深く読みました。ごんが兵十に寄せる思いの行方を語り合っています。ただ、語り継がれたことには結びつきにくい方向に進んでいきました。

授業の流れを少しとばして、子どもたちが自分の感想を発表しあうところに進みます(橋本)。

みなみ＝私はこの話はごんと兵十の思いが詰まった話だと思います。私はごんの後悔する気持ちやお母さんをなくした悲しい気持ちは経験してなくともよくわかります。ごんの気持ちはわかるようでわかりません。イタズラをして、どこが嬉しくて、どこが楽しいのかがよくわかりません。

私はごんが栗を持っていくのは(うなぎのつぐないがしたい!)っていう気持ちで「神様のしわざだぞ」って加助に言われても(どうしても自分がやってる!)って知ってもらいたいと思っていると思うし、アピールしたかったと思います。だからその気持ちが私にはわかります。ごんの栗を置きに行きたい気持ちは分かるけど私なら「神様のしわざだぞ」って言われたら「もういいや」って置きに行かないと思います。それに撃たれたりひどい目にあわされる覚悟はしていると思うけど、そんな怖い覚悟をしてまでいかななくてもいいと思います。

私はこの話はいい話だと思います。ごんも兵十もいい人だと思います。ごんも兵十のお母さんをなくした気持ちと一人ぼっちになった気持ちは、ごんもわかるし、ごんもうなぎをとって後悔したし、兵十もごんを撃って後悔したし、両方後悔した同士だから二人とも自分の「(あ～やらんだらよかった)っていう後悔したときの思いはわかりあえると思います。

最初はかわいそうだと思っていたけど、今思うとよかったと思います。最初はごんが殺されてかわいそうだと思っていたけど、ごんは最後に自分がやったって気付いてもらえたからよかったと思います。

あやね＝私は、この話は、決めつけたりするのは、よくないってことを伝えたいのと、いい話だと村の人の心に残ったから語り継がれてきたんだと思います。誰でも思い込みはしてしまうと思うけど、兵十が、いたずらされたから、ごんを悪いきつねだと決めつけているし、ごんも、兵十からしたら、嫌なきつねなのに、勝手に兵十のことを

家族みたいに思って何をされるかわからないのに兵十に近づいていっているからです。ごんはどうしても気付いてほしいって気持ちもあってうちの中へ入ったんだと思うけど、前までは兵十のことを怖がっていて、家の中には入らなかったのに、ちょっと油断してしまっている気がします。兵十も本当のことをみていないのに、ごんはひどいいたずらばかりする悪いきつねだと決めつけて撃ってしまって悪い結果になってしまったから、決めつけたり、勝手に思ったりするのはいいことではないって伝えたかったんだと思います。

兵十と一緒に、不思議なことを考えていたら、村の人もごんのことが優しいきつねと分かって、兵十は後悔したと思うし、反省もしたと思うし、この話はいい話だと思って語り継ごうと思って語り継がれてきたんだと思います。

私は、この話は、すごくいい話だと思います。いたずらばかりしていたごんの変化にはびっくりしました。いたずらばかりしていたごんは、人が困ることばかりして嫌なきつねとっていました。でも、兵十に栗や松茸をあげているごんは好きです。もう悪いきつねだとは、思わなくなりました。でも、この結末は嫌です。せっかくごんは、いいことをするいいきつねに変わったのに、撃たれてしまったからです。ごんと同じ一人ぼっちだから、兵十は遊んでくれるかもしれないと思って兵十と仲良くなりたかったと思うけど、仲良くなれなくて、ごんはかわいそうです。兵十も、いたずらされている時は、かわいそうだと思っていたけど、今は、ごんを撃たなかったらよかったのに、と思ってしまいます。でも、兵十がごんの変化に気がつけなかったのも、しょうがないのかなって思います。こんな結果になったのも、悪いことをしたごんも悪いけど、ごんが前に出れないような、前に出たら何かする村の人たちも悪いと思います。

ほなみ＝私は、ごんぎつねは、テレビで見て知っていました。でも、教科書で勉強すると、兵十や、ごんの気持ちが、分かってきて、こんなお話なんだなって改めて思いました。最初は、このお話は、嘘なんじゃないのかなと思っていました。でも色んな疑問や教科書には書いていないことをみんなで話し合ったりして本当なんじゃないかと思ってきました。

私は、ごんぎつねは、悲しいお話だと思います。ごんは、いたずらをしてきて、最後には、兵十のウナギを盗んだから、兵十のおっかあが死んだと勘違いして、いたずらはしてはいけないことだと反省しました。それまで村人にいたずらをたくさんしてきて後悔したことはなかったと思うけど、すごく後悔しているから、栗や松茸を持ってきている間は、いたずらはしていないと思います。ごんは食べ物をとって兵十の家に届けているから、いたずらする時間もないし「もういたずらはやめよう」とたいがい思ったんだと思います。今は兵十のうなぎのつぐないで精一杯でかわいそうだと思います。

でも、ごんは兵十と仲良くなりたかったんだと思います。ごんは仲良くなりたい気

持ちだけど、兵十の方はごんのことはまだ知らなくて仲良くなりたいという気持ちはなかったと思います。ごんはいわしを兵十の家にはうり投げてから、次の日に兵十の家へ栗を持っていくと兵十がぶつぶつ言っていて、これはごんは相当ショックだったと思います。渡す勇気も出なかったと思います。でも、怖かったけど、これはうなぎのつぐないだからと思ってあきらめなかったんだと思います。

加助が「栗や松茸を持ってくるのは神様のしわざだぞ」「神様にお礼を言うがいいよ」と言って、兵十が「うん」と返事したとき、ごんは怒っていました。でも兵十の「うん」はあんまり信じていない感じの「うん」なんだと思います。こんなことがあってもごんは栗を持って兵十の家へ行くからえらいと思います。ごんはそれから撃たれてしまうけど、兵十に気付いてもらえたから、よかったと思ったと思います。もし気付いてもらえなかったら、すっきりして死ねないと思います。だいが君が言っていた火縄銃から出た青い煙は今の兵十の気持ちだと思います。ごんはかわいそうだと思うけど、兵十はすごく後悔していると思います。ごんが死んでから2、3日経って、兵十が加助に一番に言いに行ったんだと思います。それから加助も村人に次々言って行ったんだと思います。そして殿様に言ったり、昔話とかになっていったんだと思います。

中西 T = この終わりの感想、内容を見ないで量だけ見ても、みんなすごい量を書いているよね。これだけ書けるっていうのは大したものですよ。内容もしっかり書けると思うよ。

※こう中西先生は子どもたちに呼びかけて授業を終えました。子どもたちはごんと兵十の物語に真剣に向き合い、いろんなことを考えました（橋本）。

最後に授業全体をふりかえって、中西さんはこう述べています。

活字にすると活発に意見や考えが出される授業のように見えますが、たくさんの沈黙がある授業でした。ただ書かせると、しっかり聞いて考えているのだなと感心させられることは多かったです。逆にこんな素敵な発言をしているのに文章を書くことに自信が持てない子もいました。最後の「なぜ語り継がれてきたか」については、あえてまとめることはしませんでした。なんだか道徳的になりすぎるような気がしたからでもあります。ですがもっと踏み込んで話し合えばよかったのかなとも思います。ただ、みんなが「ごんぎつね」の世界に入って、ごんや兵十を見たかのように、考え話す姿は素敵でした。作品世界を創っていくなかで成長を実感できたり、新たな一面を発見できることは教室の最も楽しみな営みです。今回時間数が多くなってしまいましたが、それは考えが堂々巡りして授業が停滞したからです。そこにどう切り込むかという手立てを用意すること、それが自分にまだまだ足りない力なのでしょう。

中西さんも言っていますが、子どもたちが「ごんぎつね」の世界に入って、ごんや兵

十を見たかのように、考え話す姿は本当に生きいきしています。子ども自身が、自分の成長を実感したり、友だちの価値を見いだしていったのでしょう。ぜひホームページで全授業記録をお読みください。

「ごんぎつね」については、今日もいろんな読みが提示されています。昨夏には田中実さんの「兵十の母恋が紡ぎだしたごんの物語」という読みを聞きました。藤原先生はかねてから「よそ者ごんの越境をごん側から語らせる意味」を問題にしておられます。わたし（橋本）は、『日本文学』の8月号に考えを書かせてもらいました。これもホームページに載せました。いずれにしても、ごんと兵十の物語をどう読むかではなく、その物語がどのように語られてきたか、どう紡ぎだされてきたかを問うています。今回の中西さんの実践は、授業の次元でその課題に切り込んだものです。「ごんぎつね」実践の中でも新たな段階だと思います。ありがとうございました。